くらいへや

一

袋に触るのも黷らわしい。見た瞬間「やっぱり」と声を上げた。先程のカップルを思い浮べて忌々しく思う。

中には触れない様慎重に袋を持ち上げる。ビニールに包まれた中には使用後のコンドームがあった。他の室からは騒々しい音楽と調子外れな歌声が聞えた。タオルでテーブルを拭いて室の清掃を終える。

「考えられなくない」

受付に戻って大学生の佑君に愚痴った。佑君は身に覚えでもあるのか苦笑い丈して何も言わない。冴子の憤りは収まらなかった。プライベイトで抱かれた事なんてもう随分ない。が自分は常識の欠如に就て怒っていると

信じた。

自動ドアが披いて入らっしゃいませという。愛想がないのはいつものことだったが、客の姿を見た瞬間ドキリとした。宮内さんだ。

「こんにちは」と笑う。

「二時間でいいですか？」

聞きながらパソコンに入力する。宮内は「はい」と笑いながら会員カードを出した。「カラオケリョウ」と書かれたカードはよく使われている割に奇麗だった。宮内の顔を見て今日は土曜日だと思い出した。カードを返す時、薬指の結婚指輪を瞥りと見た。

室までのご案内を終えて戻ってくると、佑君がニヤニヤしていた。「ご機嫌ですね」言うのでうるさいんだよと肩を強く叩く。「痛っ」と佑君が肩を擦過ったが、仏頂面を作って無視をする。

二

アルバイトが終って店を出ると、夕方だった。一時期に比べると日が短かくなったが、夫でも未明るい。佑君も帰る所だったので、「一所に帰ろうよ」と言うと、「いや、ちょっと……」と濁す様に答えてから「彼女と予定が」と思い付いた様子で付け足す。なんだよと胸の中で毒吐いて夕日を浴びた。

土曜日の駅前は人で溢れていた。見ないようにして本屋へ向う。本屋へ這入り、目当ての漫画を探していると、女の子二人組の会話が聞えた。

「私来月二十四だよ、危いよ」

「先輩、危くないっすよ、まだ若者です」

「いやもうおばさんだよ自分でわかるもん肌の衰ろえとか。あんた好いよねまだ二十二でしょ？　彼氏と結婚も考えといた方が好いよ」

「いやーもう二十二年も生きたのかーって

感じすね」

冴子は思い切り舌打ちした。目指す棚を二人が塞いでいたこともあるし、小娘が慨嘆しているのに腹が立った。じゃあ三十を超えた私は老婆さんか？　憤おりと倶に奪うように目当ての本を取りレジへ向う。「何今の」と聞えたので怒鳴り散して遣ろうかと思った。

駅に近いカフェへ行きソフトクリームの載った甘い珈琲を頼んだ。疲れた時には甘い物だ。フーフーと心を落着けて席を探す。早く漫画を読んで没頭しよう。泣いてもいい様に小さいタオルも持って来ている。喫烟席へ行こうとしたがある席で目が留った。

宮内さんだ。

宮内が席に座って本を読んでいた。「こんにちは」冴子は声を懸けて素早く対いに座った。

三

「ああ……こんにちは」

宮内は少し戸惑った様子で答えると本を閉じた。「あ、あのーリョウの柳(やなぎ)です。カラオケの」改(あら)ためて自己紹介すると「ああ」と少し笑った。

「エプロンがないので、一瞬分(わか)りませんでした」

冴子はエプロンで人を判断しているのかと思いながら

「ああ、ですよねえ」

と一番可愛らしい声を出した。

宮内が本を仕舞(しま)おうとするので「何読んでたんですか」と訊(き)く。

「いや、これは……」宮内が随分狼狽(ずいぶんうろた)えた。

「何で左(そ)んなに動揺してるんですか。あ、さてはエッチな本でしょう、見せて下さい」

「左(そ)んな訳ない」

強い口調で宮内が否定する。冴子は動じず

に更に迫った。

「じゃあ、見せて下さい。難かしい本ですか？」

「いや、これは、偶々……」

観念した様に渡された本を見て冴子は笑った。「あなたもすぐプロレベル！　カラオケ上達テクニック１００」という本だった。

「いや、ほんと、偶々。いつもはミステリー小説とか読んでるんだけど……」

「あはは、隠さなくて好いんですよ。好いじゃないですか、ほんとうに歌うの好きなんですね」

「うん……」

目を細める冴子に宮内は恥しそうに頭を掻いた。宮内は毎週土曜日、決まって二時間だけ一人でカラオケをしに来る。冴子がカラオケ屋でアルバイトを始めてからまだ三カ月だが、殆んど同じ時期に通い始めたのだと言う。

四

「左う言えば、宮内さんご結婚されてるんですよね。奥様とカラオケ来たりはしないんですか？」

「妻は、左様なに好きじゃないので。……それに、一人で来た方が楽ですし」

「ああ、分ります。歌う曲とか、順番とかね」

「左う左う。一人だと、完全に自由じゃないですか。やっぱり誰かと来ると色々気を遣って仕舞って」

突然話し懸けたので、気まずくなったら何様しようという不安もあったが、共通の話題がある為かスムーズに話しが進み冴子はよしと思った。続けて宮内が言う。

「やっぱり、カラオケで働らく位だから皆さんカラオケお好きなんですか」

「好きですね、あたしは大好きです。働らく前にも一人でカラオケ行ってましたし、『あ

じさいからひまわりまで』って言うアニメ御存(ごぞん)じですか？　知らない？　見て下さいお勧めなんでなんだったらＤＶＤ貸しますんで、私左右(そう)言(い)う少しマイナーなアニメも好きなんですけど、左右(そう)いうのも気兼(きがね)なく歌えるんで一人は最高ですね、でも共通の趣味の人と行ったらもっと最高でしょうけど。宮内さん歌手のディムルム好きなんですよね、能(よ)く歌ってますもんね。ほんとお上手ですよね、いやほんとに御世辞(おせじ)じゃないですよ、廊下通った時に能(よ)く聞き惚れてますもん。私も大っ好きなんですよディムルム。もう二十年以上活躍してますよね、中学高校の頃から大ファンなんで最早(もう)ベテランですよ、ファンのベテラン。え、宮内さんも？　左(そ)うですよね私達の世代は大体一度は好きになりますよね。あ、私と宮内さんほとんど同じ歳ですよ、会員情報見ました。ディムルムの何が好(い)いかって言ったら」

五

冴子は幾らでも話していたかったが宮内が途中からチラチラ時計を見ながら「ごめんなさい左ろ左ろ」と最終的に割入って腰を上げたのが不足だった。折角二人に共通した話しで盛り上がれたのに。然し宮内がカラオケの帰りに此店へ寄ることがあると知れたのが収穫だった。

「お話し聞けて楽しかったです、有難うございました」

宮内が去り際に莞やかに言うので「やっぱり、紳士だなあ」と思う。是迄自分の周りに居なかったタイプだ。可愛く手を振って見送った後「しまった」と冴子は思った。こどもが居るかどうか聞き忘れた。が些細なことだと思い直す。次訊けば好い。今はどんなチャンスも逃し度ない。冴子は昂揚した気分で漫画を読み始めた。

店を出る頃にはすっかり暗くなっていた。

来週の土曜日を今から待ち遠しく思う。高架を走る電車が明るく輝やきながら遠去かってゆく。

今日はもう三人目だ。仲々早いペースだった。しかも指名をもらえたので稼ぎもいい。考えながら口と手を動かすと客が射精する。

「いっぱい出ましたね」

サービスで言いながら微笑んでみせる。客は呼吸を乱しながら「よかったよ」と言う。是が宮内さんだったらなと思う。一度で骨抜にしてみせるのに。オプションで胸を揉まれたが事後は感じる佯をするのが面倒なので黙々と後処理をする。

もう一つの夜の仕事は矢張稼ぎがよかった。もう十年以上働らいたり離れたりしながら続けている。此仕事をしていると本当に男は馬鹿だなと思う。下半身に脳味噌があるとは能く言ったものだ。宮内のものも早く啣えて種を宿したいと思う。左右して結婚してこ

の生活から脱け出す。

六

終って店から出ると日付が変っていた。昔、最初に此所を退めた時はネイリストとして働らき始めたが、先輩が嫌な奴ですぐ退めてやった。始めた許りで旨く出来ないのは当り前なのに、研修中に失敗を重ねる姿を見て「今迄何やってきたんですか」と先輩は執拗に責め立てた。歳下の癖に目上の人間を敬まうことを知らない奴だった。啖呵を切って退職したらお金がなくなったので夜の仕事に戻った。

其次は事務の仕事だった。当時は二十六歳で、小さい建設会社だった為、他の従業員に女性がいなかった。年配の人許りだったが男性社員が優しくして呉れるのでまあまあ居心地は好かった。或日社長から出張に随いてくるよう指示を受けた。何をすればいいのだろうと思いながら行くと、現地でホテルの部屋

が社長と同じであることをさらりと告げられた。是は詰り左右いうことだろうなと思ったが今後更に優遇されるであろうことを打算し受け容れた。社長は下手だったが感じる佯をすると至極喜こんだ。特に下手なのが前戯で痛い思いをすることも多々あったが、左右いう時はおねだりして早く入れさせ終らせた。出るのが早い所も好かった。

社長は二代目とかで「お金がない」が口癖だったが会社名義でいい車を買い払いは悪くなかった。至れり尽せりという程ではないが通常の事務職位の給料に昼夜の食事がよくつくので悪くはないかもなと思った。が三カ月で奥さんに露れ激怒され会社を追い出された。「私は何も悪くない、迫ったのは社長だ」と主張したが聞く耳はない様だった。今振り返って正妻の座を奪っておけばよかったかとも思ったが、禿げたおじさんと大して気もち好くないセックスをし続けるのも苦痛だなと勘定する。

七

退めてから暫らくは「下らねえな」と働らく気が起きなかった。慣れもあるのだろうが夜の仕事の方が楽に繋累もなくお金を稼げる。当時の彼氏は退めたことにも夜の仕事に戻ったことにも「そう」としか言わなかった。次の言葉は「新しいゲームが出るからお金貸してくれない」だった。「貸してくれない」と言って返って来たことはなかったが仕方ないなあと思って一万円を渡した。

此時よりも前の彼氏は働らきもせず冴子の部屋に入り浸った。左して一日中パソコンに対いオンラインゲームをやっていた。出会ったのが其ゲームだったので冴子もどんなものかは知っていたが、既に飽きていて能く其所迄嵌入れるなあと彼の背中を見て思った。付き合った当初は甘えたいのでゲームの邪魔をしたが、段々正気とは思えない位怒るようになったため後半は何も言わなかった。が彼

が少額ながら借金をしている事が分り部屋から追い出した。ゲームをしている時以外は大人なしい男だったので以後何の連絡も来ない。

夫に比べればアルバイトをしている此時の彼氏は随分好かった。説教染みたことも言わないしセックスにも手を抜かない。が結婚となると別だった。建設会社を退めてから三年が経ち二十九になっていたが、夫迄「一生結婚する積りはない。必要もない」と公言していた気もちが少しずつ変ってきた。自分はいつまでこの生活を続ける・続けられるのだろうと考えると漠然とした、雨雲のような不安が遠くに見えた。三つ歳下の彼氏は二十六歳だったが依然としてアルバイトで特に将来のことも考えていないようだった。年齢の所為とは考えたくなかったが、此所目に見えて指名の数が減ってきた。客から指名されると報酬が上乗せされるのだが、夫が少なくなったので実際に稼ぐ額も減っていた。此儘じゃ

あ不可ないと一念発起して又働らき始めることにした。

八

建設会社の事務が楽だったので又事務をやろうと思った。但小さい会社の面倒を味ったので今度は大きい会社へ行こうと思った。以前は可成簡単に採用が極ったので、夫程構えずにいたら仲々極らなかった。一度などは「今迄何をやってきたの？　何で正社員にならなかったの？　もう三十でしょ」と暴言を吐かれた。「まだ三十じゃありません」と毅然と言い返して帰って来てやったが、非常に失礼な態度に沮喪した。

夫でも七社ほど受けたら仕事が極った。是でよしと思って働らき始めたら、又沮喪した。建設会社の時は周りが甘やかしてくれたし、大した業務もなかったので楽だったが、其分パソコンの能力など何も身に即いていなかっ

た。お局様気取りの主任から「こんなこともできないんですか」「じゃあこれは。これも？」「前に事務やったことあるって聞いたけど嘘なんですか」と責め立てられた。

嘘ではなかった。事務をやっていたのは本当で、ただ受からないのでワードだのエクセルだのと訊かれた時にはいはいと答えたことはあった。だがあれは受け流しのはいはいであって出来るを意味するはいはいではない。何故そんなことも分らないのか。自分が此様なことを言われる筋合はないと冴子は憤おった。

ただ面倒だった就職活動を思い出し前の様に即退めることはなかった。耐え忍ぶ自分を大人になったなと冴子は褒め称えた。ただ夫には若くて優しい男性社員がいたことも関係していた。球君と言った其社員丈は右も左もセルも書式も分らない冴子に根気強く仕事を教えてくれた。其所々々には恰好々かった。ただまあ好みのタイプではないなと思いなが

ら冴子は此所ぞと許りに甘えた。分らない点があれば「球くーん」と猫なで声を出し肩や肘や腰を触る、凭れ懸る。其度に他の女性社員が苛立つのが見えた。

九

冴子だけではなく各部署に計十人の社員が新らしく入った為、合同の歓迎会が披かれた。社風なのか参加者は夫程多くなかった。新入社員は全員で歓迎するのが常識でしょと冴子は思ったが、球君がいた為文句は口に出さなかった。球君は仲の好い男の同僚と話していたので、何気なく素早く球君の隣りに座を占めた。

糞面白くもない部長の乾杯の音頭を聞き流し、暫らくは大人なしく球君と同僚の話しを聞いていた。「えーほんとですかー」「夫もっと詳しく聞かせて下さい」と飽迄控え目に二人に割入って話しを聞き出した。然し二杯

目三杯目となり酔いが回って来たと判断すると主導権を握る可く猛烈に攻めた。

「球君って彼女いるの」

「今まで何人ぐらいとエッチした」

「私下ネタ全然オッケーだから」

冴子は是迄の経験から男性は女性が下ネタ（品のない話）に応じられると悦ぶという統計を得ていた。だから自分は応じられる所か身ずから提供できるという強みを積極的に押し出した。夫を聞いた女性陣の

「おばさん必死すぎ」

「球さん可哀想」

「蠅っ」

という声も女性としての魅力に欠けることからくる嫉みの声と解釈した。

球君は途中からチラチラと或女性社員を見出した。其表情や仕種からあの子に気があるのかも知れないなと思った。同僚も「おい、軈ろ移動しようぜ。柳さんすみません」と助け舟を出した。冴子は球君の腕に獅噛み付

き「まだいいじゃないですかー」と豊満な胸を押し当てた。スタイルには自信がある。其後も球君を押し留め電話番号を交換することにも成功した。

十

電話番号が分ってから、冴子は毎日球君へメールを送ったが、球君は筆細心でないらしく返って来るのは精々一日に一度だった。冴子からは二通か三通程連続して送って上げているので、もっと教育して上げなきゃいけないなと思った。冴子が寝反べって携帯電話をいじっている時彼氏は横でゲームをしていた。

ただ段々と球君の対応が悪くなって来ていた。呼んでも以前の様にすぐ来てくれない。「今手が離せないので」「これ、此前も訊いてなかったですか」と冷たいとも感じられるような話し方をすることもあった。ただ夫は

プライベイトの距離が近付いてる所為かもなと思った。職場に露れるのは恥しいのだろう。「今度会社帰りに飲み行かない？　また大人の話しよ」とメールを送ったが、此時は折悪しく断わられた。

別に是が非でも抱いて欲しい訳じゃない。聞けば安月給だと言うし、夫でも一人よりは増しかなと思って結婚を考えている丈だ。生で中で出していいと言って喜ばない男は是迄いなかった。二十歳の時は剿してしまったが今度は夫を楯に結婚を迫る。思えば二十歳の時は誰が父親か分らなかったが自分にお金を一円も払わせなかったあの男、会社で相当いい地位に居ると吹聴していたがあの男を父親にすれば好かった。惜しいことをした。

冴子は思い付くとすぐ行動したくなる性分なので電話帳で男を探した。然し携帯なんてもう何回変えているか分らないし今は男の名前も思い出せない。落胆していると携帯が鳴った。球君からだった。

「そうなんですか」

是に笑った絵文字がついた丈のメールだった。散々待たせて置いて是かよ。苛立って携帯をベッドに擲げ付ける。掛布団が衝撃を吸収する。「どうしたの」と彼氏が少し驚ろいた声を出したが、「うるさい」と腹立ちを強い言葉に換える。

十一

「もうぼくに聞かないで下さい」

いつもの様に球君を呼ぶと震えた声で此う答えた。は、意味が分んない、答え様とした冴子は若い女子社員数名に遮切られた。

「柳さん、いい加減にして下さい。球さん嫌がってるのわかりませんか。球さんだって仕事あるのに貴方の所為で全たく進まないんですよ。ていうか貴方仕事覚える気あるんですか？　ここ這入って半年？　四カ月？経つのに貴方みたいに仕事できない人いませ

んよ。先月入った新人さんの方がよっぽど仕事出来ます。何しに職場来てるんですか？」

「意味わかんない、誰あんた」

「ああ、色ボケおばさんは人の名前も覚えられませんか。もういいです。できれば自主退職して頂けませんか？　今日帰って頂いても構わないんで」

「あたしはおばさんじゃない！」

憤慨した冴子は女子社員を怒鳴り付けて帰ってやった。仕事ができない？　わかりやすく教えていない丈じゃないか！　自分の怠慢を棚に上げ、数を頼んで一人を悪者にする遣口にも腹が立った。球も球だ。ああいう時は女子の味方をするのが男の役目だろう！あんな頼りない、情けない男だとは思わなかった。がっかりした！

フーフーと息を荒げて家に帰ると彼氏が寝転がってゲームをしていた。「お帰り」目だけ上げて挨拶する。「聞いてよ！」冴子は濫れ出した鬱憤を猛然と喋舌り出した。彼氏は

ゲームをやめる気配がない。「聞いてんの！」怒鳴ると彼氏が言った。

「今いい所だから、後にして」

其後のことは覚えていない。泣き腫らした目と強盗に這入られた様な家が残っていた。手当り次第にものを彼氏に投げつけたのだろう、皿は割れ服は飛び虚に視線を上げると蛍光灯も割れていた。夫以来彼氏は帰って来ない。

十二

「聞いてよ！」

愛美を呼び出し蜿蜒と愚痴った。愛美はけらけらと笑っている。腹が立った。

「だってさ」

「まあまあ、夫は災難だったね。じゃあ片付け一人でしたの」

「したよ！　彼氏が話し聞いて呉れりゃあ此んなことになんなかったのに」

愛美は又笑った。落ち着いたカフェには穏かな日が射していたが、冴子の声が場違いに響いた。冴子は頭を抱えた。

「あいつ散々金貸してやったのに……全部返せよ！」

「じゃあ、仕事、どうすんの。又あそこ戻るの」

「えーまあ暫らくはいいかなって感じ……」

暫らくはいいとは言ったが、貯蓄も略なく夜の仕事に戻るのは時間の問題と思われた。愛美も昔し同じ店で働らいていた、というより冴子を誘ったのが愛美だった。愛美は其所迄可愛くもなくスタイルも冴子より劣っていたが、愛想がよく気配りができ冴子は売上で愛美に勝ったことがなかった。客の顔をすぐに覚えるので客から喜こばれ、よく指名された。

然し愛美は或日淡然仕事をやめた。聞けば囲ってくれる男が現われたのだと言う。左して二度と夜の仕事に戻ることはなかった。で

も男の気分で抱かれて奴隷みたいだねと言うと指一本触れさせていないと愛美は答えた。抱かれる用の男は別にいる。冴子は意味が分らなかった。が強がって嘘を吐いたのだろうと今でも思っている。

愛美が退めてからも二人は定期的に会った。前回会った時結婚したと報告するので痛く驚いた。冴子は愛美の服を顎で指して言った。

「服また偉く地味だね。旦那の趣味？」

「そうそう。私清楚なお嬢様で通ってるから」

「誰が」冴子は笑った。

十三

「旦那と夜の生活はどうなの。新婚さんは毎晩してんの」

「旦那童貞だったから下手なんだよね。だからすぐやりたがるんだけどさ」

「童貞」冴子は蔑すみ笑った。「あんたそんなんじゃあ満足できないでしょ。手取り足取り教えて上げてんの」

「いや、私処女だったことになってるから。簡単だよ、初めての時痛がって『血が出ない子もいる』って教えて上げたら信じた」

冴子は又笑った。「じゃあ旦那も童貞じゃないかもしんないじゃん」

「穴の位置も分んないんだから童貞と一緒だよ」

冴子は愛美の気に入りの不倫相手の話しを聞いて腹を抱えた。結構な変態で奇抜な体位を試そうとしたら足を捻挫したと言う。然し相当身體の相性がいいらしく冴子は羨やましくなった。

愛美と別れたら急に人恋しくなった。一人きりの暗い部屋を思い出し、帰りたくない気もちになる。携帯を取り出し出て行った彼氏にメールしてみる。

「帰ってこないの」

返事ないかなと思ったらすぐに返ってきた。「今度帰るね」笑った絵文字がついていて、「今度っていつだよ」と毒を吐きながら心の隅でワクワクしている自分にも気が付いた。なんだ、ちゃんと帰ってくるんだ。

しかし彼氏は待てど暮らせど帰ってこなかった。そうだ、いつも曖昧な答え方をして話しをはぐらかす奴だった、と冴子は憤おり「てめえふざけんなよ」と彼氏にメールした。

メールアドレスは変更されていた。

冴子は程経ずして夜の仕事に戻り、以後恋人はできていない。三十二になった。夜の仕事をなくせない迄も減らさないととカラオケの店でアルバイトを始めたが、嫌な事許りあって鬱憤が堆り積る。

十四

「あ、宮内さん」

カフェへ行くと宮内がいたので、素早く向

いを占めた。宮内は読んでいた本から顔を上げ「こんにちは」と微笑む。

初めて宮内と遭遇した日から、冴子は土曜日のアルバイトが終る度同じカフェへ足を運んだ。然し宮内と出遇うことはなかった。カラオケには変らず来ていたから、自分が避けられているのか、元々毎週来ていた訳ではないのか、冴子は疑がったが一カ月経った今日出会えて安心した。

「あ、まさかその本」

冴子は悪戯っぽく笑って宮内の持つ本を指した。

「今日は普通のミステリーです」

表紙を見せて宮内も笑い返した。

非常にいい雰囲気で会話が始まり、冴子は内心よしと拳を握った。世間話を交して糸かにだが距離を縮める。ここを慎重に埋めていかないといけないんだと冴子は経験から学んだ。自分の成長を頼母しく思った。

特に歌手のディムルムを好きになったきっ

かけや、どの曲が好きかなどの話しが盛り上がった。インターネットではアルバムの「幽室」が全盛期であるとの論調が勢猛だけれど、最近の曲にもとてもいいものは多いと冴子が熱弁すると、宮内は厳粛な頷突きで以て同調した。宮内は本当に学生の時から好きでCDも全部持っていることが分り、冴子が敢て蔭で名曲と名高いもののアルバムには収録されていない曲を挙げると、宮内もあれは慥かなものだと熱を込めて賞讃した。

「宮内さん、凄いなあ。私あの曲知ってる人に実際会ったの初めてです」

「いや、凄いというか、なんと言うか。ぼくも周りではいなかったですけどね」

「いや、なんか嬉しいですよ、凄く。宮内さん、よかったら今度カラオケ二人で行きません？　全曲ディムルムにして二人で熱く盛り上がりましょうよ！」

十五

冴子が言うと宮内は狼狽えた。

「いや、女性と、二人でというのはやはり、……妻に怒られますし」

「あ、何か病しいこと考えてるんですか？やだーホテル行くんじゃないんですから。友達と二人でカラオケ行く位は普通のことでしょう？」

「病しくなくてもですね、その、誤解を招く様な行為はですね、慎しみたいというかなんというか」

「うーん、じゃ、こうしましょう！　携帯のアドレス聞いたりしないので記録に残らないようにしますし、普段行かないような駅にすれば見られないから誤解の招き様がないでしょう。どうですか」

「いや、夫でも、しかし、……」

「お願いします、私、いい歳してアルバイトだから、昔しの友達ともほとんど疎遠にな

ってしまって、誰かとカラオケに行く機会なんてないんですよ。色々つらいことがあって、事情があって、アルバイトしてるんですけど、夫(それ)でも偶(たま)には其様(そん)なこと忘れてパアッと楽しみたいんです。だめですか？　私、楽しむこともできませんか？カラオケ行く丈(だけ)ですよ？だめですか？」

「いや、だめということは、ないけれども……」

「ありがとうございます！　じゃあ、来週の土曜日で駅は〇〇駅にしましょうね。いいカラオケ屋さんがあるんです、目立たなくて雰囲気もいいし。よかったです、宮内さんがだめじゃないなんて言ってくれて。私、アルバイトだから、アルバイトやってる女なんかと宮内さんカラオケもしたくないんじゃないかと思って、……違いますよね？」

「したくないとは言わないですが……」

冴子は猛烈に押して宮内と約束を取り付け、上機嫌だった。翻意(ほんい)の時間を与えない為

に「お時間大丈夫ですか？　駅まで一緒に行きましょう」と気遣う佯をして席を立つ。勿論カラオケだけで済ます気はない。其駅周辺にはラブホテルが建ち並んでいる。うまく行けばカラオケでどうにかして続きをすぐできるようにしようと冴子は考えた。

十六

「左右言えば、宮内さんお子さんいらっしゃるんですか」

「いえ、まだなんですよ。そろそろ欲しいねと妻とは話しているんですが……」

「あ、そうなんですか。夫じゃあお仕事は何をされてるんですか」

「公務員です、市の」

「え、公務員。凄い凄い凄い公務員なんですか、凄い。じゃあお子さんできても安心ですね、クビないしお給料いいですもんね、テレビで公務員の平均年収見ましたよ、凄い凄

い。公務員凄いですね」

「いや、別に凄い訳では……給料も年齢とか仕事の種類によりますよ、……ぼくは安月給です」

「夫でも公務員は凄いんです！」

冴子が目を輝やかせていると宮内が乗る電車がやってきた。二人は逆方向だ。冴子は公務員の宮内に自分の持つ一番の笑顔で手を振った。

あれが公務員か。冴子は自分の人生と公務員とが結び付く日が来るとは思わなかった。是まであったのは役所の窓口で文句を言う時ぐらいだった。夫が公務員の家庭に入れるかもしれないチャンスが巡ってくるとは。冴子は今まで苦労を重ねてきた自分の人生が漸やく報われるんだと夜空に夢を絵描いた。

其喜こびは一週間丸々続いた。明らかに未成年の客が来て、「酒を出せ」とごねられ断わった時、「此ババア蠅い」と悪態を吐かれても全たく傷つかなかった。あたしは公務員

のババアになる！

宮内もそうだろうと思った。別れ際あれだけ凄いと賞められて喜こばない人間はいない。きっと、今頃奥さんの無愛想に嫌気が螫し、私に乗り換えた後の凄いと賞められ続ける日常を夢想していることだろう。と冴子は夢想した。

土曜日が来た。冴子は細身の服を着て、胸を始めとする体のラインを強調させた。最近大部痩せにくくなって腹部の肉が少し余計だ。然しまだぽっちゃりという程でもないから大丈夫だろう。冴子は高を括ってカラオケ中どのタイミングで姿垂れかかるかいくつもの場面を想定した。駅に着くと、宮内がいたので、手を振りながら胸が揺れるよう敢て不器用に走った。

十七

「ごめんなさい、お待たせしちゃいました

ね」

息を切らして時計を見ると約束の時間から十分が過ぎていた。是でも平生の冴子からすれば早い方だ。早速不離こうと宮内の腕を取ろうとする。

其瞬間宮内が素速く腕を離した。其動きが感情の籠った非常に強い動きだったので冴子はキョトンとする。宮内は是迄見たことのない冷たい目をしていた。

「一つ、お聞きしたいんですが」

平らな低い声で話す。

「間違いだったらすみません。柳さん、風俗で働らいていらっしゃいますか」

冴子は目を見開いた。すぐには言葉が出てこない。

「ええ、はい、まあ」

言って後は黙った。宮内も喋舌らない。駅からそう遠くない場所で話しているが、夫程活気のない駅のため閑寂している。道路が暗くて冷たい。

「まあ、風俗って言っても大した事しませんよ。口と手で男性の処理をしてあげる丈。本番（性行為）は禁止だしソープとかデリヘルに比べたら百倍綺麗です。あいつら金の為に汚れすぎなんですよね、私は其辺りの節度は保ちたいと思ってるので。でも何で知ってるんですか？　あ、お客さんとして来たんでしょう、私に当ればたくさんサービスしてあげたのに」

「誰が行くか！」

宮内が遮切って迄大声を上げるので冴子は何この人と思った。佛然になりすぎ。「冗談ですよ、冗談」冗談の分らない人は嫌だなと思った。

「ぼくはね」宮内が語る。「風俗を軽蔑してる。親から貰った身體を黷してお金を得るなんて人間として最も卑しい行為だ。行く男も馬鹿だと思ってる。どんな病気を持っているか分らない女を抱くなんて正気の沙汰とは思えない。男も女も大馬鹿だよ」

十八

「だからね」冴子は呆れて言った。「私は身體を黷してないんですよ。お客から触られるのはおっぱい揉まれる時位、なんなら揉みます？　スタイルには自信あるんですよ。宮内さんは風俗を軽蔑してるって言いますけどもし風俗がなかったらどうなると思います？　男なんて皆な性犯罪者になっちゃいますよ。綺麗事丈では世の中回っていかないんです、第一行った事もないのに否定するって可怪しいですよ。なんなら試してみます？奥さん以外に何人経験ありますか」

「うるさい！」宮内はこどもの様な語彙で叫んだ。「ぼくの経験は妻丈だ、夫がぼくの誇りなんだ。ぼくは世の中の貞操観念が低下しているのも大嫌いなんだ、男も女も結婚の時まで純潔であるべきだ。ぼくの妻は処女だった、そんな人間がどんなに貴重なことか。経験なんて生涯にたった一人でいいんだ。君

の職業を知ったのはね、ぼくの同僚がぼく達が一緒にいたのを見て『俺のお気に入りをどうやって口説いたんだ』って訊いてきたからなんだよ。ぼくは悍ましい気もちになった。風俗嬢と一緒にいたこともぼくが風俗なんかに通っていると思われたことも何も彼も気もち悪くなった。然し人違いかもしれないと思って信じてきたのに是だ！　同僚にも人違いだと言ってしまったよどうして呉れるんだ！」

　冴子はチャンスだと思った。奥さんしか女を知らないような初心なら一度やってしまえば簡単に籠絡できるだろう。面倒臭い性格だが金さえあれば何とかなる。冴子は男が下半身で動くものと是迄の経験から知っていた。一度やってしまえば黷れているだの綺麗事も言わなくなるだろう。其時に妊娠までできれば完璧だ。私の身體を猿みたいに欲しがらせてやる。

　冴子は反論せず宮内を凝と見詰め、ポロリ

と涙を流した。

「あ、ごめんなさい」

俯向(うつむ)いて涙を拭う。宮内は全身で狼狽(うろた)えて責める口の自由を失(な)くした。

十九

「そうですよね、ごめんなさい。私が悪かったです。宮内さんに左右(そう)思われるのも無理ないです。でも、一つだけ、是丈(これだけ)は信じて欲しいんですけど、私、心だけは汚れてないつもりです。綺麗な儘(まま)でいるつもりです。誓って、自分の心に嘘を吐(つ)いたことはありません。夫(それ)だけは、夫(それ)だけは宮内さんに信じて欲しくて、……」

静かに泣く冴子に宮内は二の句を次(つ)げずにいた。冴子は少し泣いて、寄りかかり、「ごめんなさい、しばらく此儘(このまま)でいさせて下さい……」と弱々しい声で告げ、状況次第ではあるが可能なら「ごめんなさい、私、こんな時

でも宮内さんにドキドキしてます」と宮内の手を取って胸を攫ませる積りだった。其後股間でも撫でてやれば思う通りになるだろう。冴子は頃合を見て宮内に寄り懸った。

「ごめんなさい」

「さ、さわるな！」宮内は裏返った声で叫び、冴子を強く遠去けた。「さわるな！　ぼくは、ぼくは欺されないぞ！　そんな清潔さのない恰好で来やがって、欺されない、欺されないぞ！」

宮内は走って逃げ去った。残された冴子は茫然として、「また、一人か」と冷たい道路に向って独語いた。

帰ると見馴れた自宅に一人でいた。飲んで帰ろうかと思ったが、不思議に心は平静だった。段々と、年を重ねてきたことで、気もちの扱い方が旨くなったのかなあと思った。

やることがないので携帯をいじった。電話帳を「あ行」から一人ずつ見て行く。そこに

宮内の名前はなかった。出鱈目に番号を押してかけてみる。かかって仕舞ったのですぐに消して、暗い部屋のカーテンを見つめる。

二十

「聞いてよ！」

愛美を呼び出し愚痴を吐く。愛美はふんふんと笑いながら頷突いた。

「それは惜しかったね。でも、其後追いかけなかったんだ。貴方走って追っ懸けて無理矢理キスぐらいはしそうなのに」

「あー。三年前なら左右してたかもね。なんか其所までするのも億劫で」

「それおばさん通り越しておばあさんだよ」

けらけら笑う愛美に釣られて冴子も笑った。確かに左右かもなと思う。二人で集まったカフェは人が引切りなしに出這入りして騒しい。冴子の声も喧騒の中に埋れた。

「でも、本気だったのにな。人生変えられ

ると思ったのに」

「まあ、まあ、またいい出逢いがあるよ。其んな男よりいい公務員は一杯いるって。夫より聞いてよ、私こどもできた」

「えっ」

愛美の言葉に驚ろく。愛美は得意気に笑っていた。

「避妊してなかったの」

「最近はね。旦那の親から急っ付かれてたし、私もまあ年齢を考えてね」

「誰の子」

「わかんない。旦那か、椎君か、どちらかかな」

「あーあ。これであんたも遊ぶの終りだね」

「まあしばらくは我満するよ。でもねえ、なんか椎君の子のような気がしてるんだ。私あの人のこどもが凄く欲しくって、夫って今迄感じたことない感じだったのね。なんか子宮が欲するって言うか、多分左ういうのって自分の身體が一番分ってるんじゃないかな」

「私は夫より哀れな旦那の今後を祈るよ」

好き勝手言いながら幸福そうな愛美を見て、冴子は嫉妬した。この差はなんだろうと思う。どこから生れたんだろう。結婚を聞いた時は馬鹿だなと思った。老婆になるまで他人と過ごして何が楽しいのかと思った。愛美が店をやめると聞いた時も馬鹿だなと思った。稼ぎを失くして遊びや服や装飾品を買う金はどうするのかと思った。然し、其、自分が嘲けった一つ々々がこの差の原因かもしれないと考えると、面白くなかった。これを取り返して愛美を嫉妬させるにはどうしたらいいだろう。考えるとやはり公務員を逃したのは大きかった。

「あんたが地獄に落ちればいいのに」

口には出さずに心で吐いた。顔は笑って代りの言葉が出る。

「こどもの名前はもう考えてんの」

「諒がいいかなって。言偏に京都の京で諒。男でも女でもね。椎君の名前が諒介な

んだ」

「名字は？　平野(ひらの)は旧姓になるんだよね」

「宮内。宮内諒(りょう)。偶然、私も宮内なのよ。旦那は公務員」

冴子は驚(おど)ろいて目を見開いた。愛美は笑みを深める。妻が妻がと叫んだ宮内を思い出し、少し溜飲(りゅういん)が下(くだ)る。目の前の顔にグラスを叩き付ければもっと下(くだ)るだろう。